

過疎地寺院対策 ― 教区教化研究会議における意見 ―

(日蓮宗現代宗教研究所研究員)

中村龍央

第九四定期宗会において、過疎地域寺院活性化検討委員会が発足いたしました。現宗研では、二〇年ほど前にも過疎地寺院調査を行い、近年では現代宗教研究三十八号以降にも過疎地寺院について研究されています。

今年、中四国教区教化研究会議、東北教区教化研究会議において、過疎地寺院について伊藤立教現宗研主任が基調講演をされました。基調講演をふまえて討議された内容を報告いたします。

中四国教区教化研究会議

■参加者を七組に分け約十分間話し合いを行った後、それぞれの組の代表者が意見を発表。

① 大学がない地域などは、若者が都会にでる為に高齢化が進む。お寺を中心とした村おこしという点で回復を図る。都会に出た檀信徒のその後の対応。遠方に行っても案内などを積極的に送り、お寺から離れないようにする。

② 少子高齢化については、関東に人口が集中し、地方においては加速する。その為、信仰の過疎化も進み、魅力あるお寺造りが必要である。

③ 宗門の対策は行き届かなく不充分であり、過疎化等の問題は地域と一寺院の間で解決するしかない。都会の方ではお墓がない人が多い為、お寺よりお墓を選ぶという傾向がある。人がいない所では布教は出来ない為、地域に根付いたお題目信仰が必要。

④ これからの教団の維持から見れば、寺院経営から見えていなければ仕方がない。団塊の世代は地方にはほぼ帰ってこない為、これからは真剣に檀家の獲得が必要。寺院合併は仕方がない。

⑤ 本宗の対応は遅れており、他宗ですでに本格的にセンター方式をとっている。過疎化の地域で檀家獲得を目指すには、他宗の檀家を対象に布教を行う。

⑥ 信仰の面で仏教を信じない人は仕方がない。教団として日蓮宗五千ヶ寺の中で、「過疎寺院」の認定を行う。その寺院には代務任職の手續の簡素化。課金免除。無住になれば準教師制度を作る。(補教信行道場の復活など) 教師になるのを難しくするのではなく、なり易いようにする。(ハードルを上げるのは時代と逆行している) 葬儀をしない人に対して、なぜ葬儀をしなければならぬかの説明が出来るか。今の僧侶にはそれが出来ない。そのような中、これから教団が活性化するとは思えない。

■ 以上の事を背景に、信仰をどの様に勧めアプローチしていくか。

① 宗務院に在家出家者や次男の入寺を勧める部署を作ればスムーズに事が進む。

② 過密である首都圏の寺院において、システムの事例が知れた為、地方の過疎寺院にも悪いイメージが植え付けられた。いかに特色を持ったお寺造りを目指し布教していくかに重点をおく。

③ 経営、教団の維持から話を進める。関心がない人に信仰を勧めても仕方がない。

④ 教団の将来的なシミュレーションが見えてこない。数だけでなく、中身のある布教活動が必要ではないか。

- ⑤ 過疎化が進むにつれて、檀家数が約半数になる。青年教化に力を入れなければならない。核家族化で親が子どもに何も教えられない。その様な子ども達をお寺に集め、寺小屋を復活させる。
- ⑥ 第一に経営、その次に信仰をもつていかないと寺院は維持できない。地域のリーダーとしての活動が重要ではないか。
- ⑦ 寺の近くの方は、全て自分の寺の檀家にしていく運動。NPO法人などをつくり、日本文化としての日蓮宗を伝えていく。若い人にも唱題行などの修行体験を経験してもらう。

東北教区教化研究会議

少子高齢化核家族化により寺離れ宗教離れが大変進んでいる。人口減少、過疎化は大変深刻な問題である。若い人とお年寄りが別々に住んでいるがために、お年寄りが亡くなるとお墓参りやお寺の行事に来なくなってしまう、中には連絡なしに離檀するものもでてくる。親子間の信仰相続や世代交代が全く皆無の状態になっている。一人暮らしや子供のいない人が増えているために孤独な死を迎える人が増えている。無縁のお墓が増えて困っている。若者の世代には無関心、無宗教が多くみられ、葬儀や法事をなぜ行うのか理解していない若者が非常に多い。対応として、お茶呑みや人生相談といった友達感覚から檀家以外の人も密接し、それが地域への密着性を維持していく。公的役割をできるだけ受けるようにしていろいろな人たちと接する機会を増やしていく。介護施設へ行くなどしてお話をするこ

とによって宗教を超えた部分でのお寺との関わりを持たせるようにすることによって、死んだときばかりでなく生きていくうちに、お寺の方へ来てもらう。社会福祉活動としては、PTA活動に参加したり保育所の経営などにより子供たちと関わるようにしている。お寺を開放し、霊断活動、婦人部を中心とした和讃を行うなどして、できるだけお寺に来てもらうように努力をしている。

一寺院一信徒青年会作りを推進し、信徒組織を強固なものにする。マスメディアやインターネット等の広告宣伝などを使って、日蓮宗自体の存在意義をアピールする。全国の檀信徒協議会を強化するために総代を中心としたリーダー研修会を開いていくべきである。宗門で立正安国お題目結縁運動と言っても立正安国といった言葉自体が解らない教師や檀信徒が多いので中央並びに教区、管区といったところで連結して研修会や勉強会などを行っていく。宗務所を起点として、青少年修養道場や僧風林をもっと多く開いていくべきである。

宗務院として、布教方法のマニュアル本を作ってほしい。宗門として過疎化対策をもっと明確に出してもらいたい。雪のため寺の存続自体大変なので、宗門として知恵なり対策なりを出してほしい。子供がいなくて後継者問題で悩んでいるので、そのシステムを確立してほしい。今現在宗教は公益性という部分が一番問われているところであるので、日蓮宗として宗門全体として、公益性を明確にしていくべきである。

東北六県どの地域においても少子高齢化、並びに核家族化、過疎化が大変進んでいる状況である。それをふまえた上で、各寺院の住職並びに教師は、布教活動を独自で行っているが、それをサポートする日蓮宗宗門全体としてのサポートをもっとしていただきたい。教師一人一人の資質の問題でありどんなときも、日蓮大聖人の教えをしつかりと我々が理解し檀家や未信徒に教化していくべき。

現状認識として檀家の減少が大多数の寺院でみられる。中には檀家の減少を感じていない人もいるが、地域活動などから寺離れを実感している。過疎化による人口減、あるいは檀家の分散による減少に対して、遠隔地であっても檀家との連絡を密にとつて、法事、棚経など東京などの遠方であっても欠かさずに参りますと対応して、やめた檀家は少ない。墓が続かない、当代で終わってしまう、将来の檀家減少は避けられない。おじいちゃんおばあちゃん世代とその子供、孫の世代と独立して生計を営んでいるために、信仰はもちろんお寺とのつきあいも相続されないうために、寺離れ宗教離れが起きている。宗教に対するイメージがよくないのではないか、地域の活動に参加すると布教目的と

誤解されて距離を置かれる。お寺との関わりはお金がかかる。坊主丸儲けなどという不透明さが、我々の存在を一般社会から遊離させている。しかし、新興宗教は信者を獲得しているがそれはなぜなのか。それは、信者自身が布教している。僧侶という専門職でなく、信者自身が布教して口コミで信者数を増やしている。信者が自分と同じ悩みを抱えているという、一般の目線で相談あるいは悩み事に対応していくところがある。ここに我々が実際に行う行動のヒントがあるのであるのではないか。信者のリーダー、先達、寺庭婦人を布教のための潜在力として認識して活用する。檀家が少なくこれ以上減りようのない住職が、自分が日蓮宗僧侶としてやることはお題目を唱えてお題目を布教すること以外やることはないので、世間の状態がどう変わろうと自分はやるべき仕事をやるだけ。

人口の自然増減に加えて、社会増減で、過疎地域の人口の加速度的減少を避けられないに、対してどのように対応していくか、まずやれることからやる、ただし直接お寺の経営基盤になるには難しいし時間がかかる、過疎地域過密地域がある以上、過疎地域寺院の経営が行き詰まるので、過密地域へ進出する方法で教線を拡充していく方法しかない。しかし、県を跨いで行うことは同一宗教法人として法律的に難しいので、宗門、全仏教会が対応する必要がある。日蓮宗は布教を主とした宗門である、地域全部が檀家という寺院は少ないのではないか、だからここに日蓮宗の寺院があるということアピールしなければならない。お寺を寺子屋として、学習塾として活用していく、地域の方たちに唱題行などの修行体験をさせるなどして寺院を開放していく。町おこしなどの振興に携わっていく。農協などの食育行事にも携わっていく。立正佼成会の集會に本堂を貸して、住職が話をする。毎月寺報をつくって祥月の法号を掲載して先祖供養の意識を高揚させる。遠隔地へのお経廻りをしたりして、お布施が出てなくても僧侶は供養にくると意識を持たせる。自分の家の菩提寺があつてお坊さんが供養に来るんだと、何かあつたらあの坊さんに言えばいいんだと意識付けをする。グループホームや病院等でなくなった方の引き取り手がすぐに来られないときに、宗旨を問わず遺体安置所として本堂を解放している。

宗門行政に対する不信感が根強く、何を言っても変わらないという無力感がある。新宗門運動の内容もまだ解らないし、上の方では何をやっているのかと、またここで話したことは上に行くのか。宗門は過疎地域の危機感を感じてほしい。村上ファンドやライブドアは、本来株主の利益のために働かなくてはならないのに自分たちの利益のために働いてしまった、お寺も自分たちの利益のために動いていくのではなくて、檀信徒・一般市民のために地域の利益のために公益性を考えるべきである。今の日蓮宗に社会的影響を与えるような僧侶はいるのか。若い人たちに、占いに興味のある人が多いが、その人たちをお寺に結びつけるにはどのような方法があるか。海外の人たちが争いのない宗教は仏教だと認めているが、それをさらに伝えることが必要。町内の活動に出ていると、仏教のことやしきたりや葬儀のことを聞きたがっている。高齢者になってもそれらを知らない人もいる。祈祷による他宗の信者の信仰を相続させる。少子化高齢者の増加の中で、公共の仕事、役職を率先して行いその人間関係により檀家を増やす。現在帳を把握して、それを元にいろいろなお知らせをしたりして青年会を発足させたり。跡継ぎがない人が増えている現状で、永代供養を行っている。お寺が待っている状態だから、檀家離れが進んでいる。年4回の棚経、行事を続けて僧侶があるべき姿は質素でありそういう生活をする。他の宗教を勉強する姿勢も必要。民生委員などの地域に貢献できる姿を模索。子供がしてはいけないことを上手に伝えていく。親から子、子から孫へと宗教の心を伝えていくことが必要。宗務所で誕生証を発行して百日のお祝いをする。新興宗教に対する勉強、対策をしては。代務住職の役得。信行道場のあり方（有髪、僧道林）。葬儀や法要にプロとして接する姿の勉強会、それは他宗や新興宗教に誇れる姿を示す。立正安国論の精神を絶えず保って我々は日蓮宗の僧侶として進むべき。

代務住職寺院は、千葉教区、山静教区が多く、一人で二つ三つと代務している。本来空き寺をなくして必ずすませようとする方向が正しい道だとおもうが、その代務寺に入りたいたいというと、権利金を出さないと譲らない。水面下でそのようなことが実際にある。そういうことを是正することがはじめではないか。実際に調査して、空き寺をなくす

ことが第一ではないか。住職が住まないと段々悪くなるのは目に見えている。当然何ヶ寺か持つていけば葬式だけすればいいやという安易な考えを変えていかなくは衰退の一途をたどると思う。把握調査してなるべく多くの僧侶を住職として入れてあげると言うことがいいことだと思う。

東北教研における伊藤主任の発言

代務寺院の半分以上は、ボランティア的に代務住職を務めています。十ヶ寺ほど代務寺院を持つている山梨の方はそれでやつと寺門経営ができています。ある宗門の研修機関で、小さな無住寺院へ行きますかとアンケートしたがはつきりと行かないと答えました。食べていけない、魅力を感じないといえます。そういう現実をみてどう対処するかを考えないといけません。

平成十三年度の行政改革で現場の女性教師の声を聞かないで、補教信行道場の打ち切りを決めた。坊さんのハードルを高くしている問題がある。天台宗は、六十歳で定年になった方の坊さんを作ること十年以上前にやりました。結果は大失敗でした。お経が覚えられない。行儀作法ができない。社会ずれしすぎている。坊さんの品格が欠ける。一年目二十数名の応募があったが一年でゼロになってしまった。自分からリタイアした。中山法華経寺などでは、沢山在俗から信仰心に燃えて出家なさっている。皆寺を持たないでやっている。寺を持たないでやることの有意義性、利便性がある、寺を持って初めて住職お坊さんという日蓮宗の傲り。ハードルを下げて、まずお坊さんにして、まず師匠がよく教育する。そして宗門の教育を受けさせるという、二段構えでやらないといけない。書類上の師匠が沢山いる。僧侶になったあとは、本人の問題。あと宗門に頼むでは困る。坊さんにさせる時点で師匠が、その見識で出家のゴーサインを出す。出した以上は一人前の坊さんになるように終始しつける。師匠として教育を加える。宗門にだけ教育が足りないというのではなく、師匠の問題にもなっている。それを解決して初めて前に進んでいく。

代務住職に関する考察

私も、代務寺を一ヶ寺もついています。以前は住職をしていて、師父が遷化して師父が住職をしていた寺院を継いだため、代務住職となりました。代務寺は檀家が数軒で、寺の収入だけでは生活できません。以前は同じ市内のA寺に山務員として勤務して生計を立てていましたが、そのA寺の方も山務が減り例え別の方が、代務寺の住職となり私の代わりにA寺の山務員となっても生活できないと思われれます。また、代務寺の檀家の多くは新しい住職が来ることを好みません。これは、よく言えば住職と檀家の人間関係がうまくいつているためだと思います。私の地方では月回向があるため、毎月お経を上げいろいろとお話をしたりして、信仰を勧めたり、信頼関係を築いてきました。この関係をやり直すことを嫌うのだと思います。私が入寺する前、前任職遷化後六年間、代務住職が遠方のため干与人が回向廻りをしていました。そして私が住職となったので、檀家は先代住職遷化後三人の住職と付き合ってきたわけで、更に新しい人と付き合うことを敬遠するのだと思われれます。また、新任職を迎えると入寺に当たって経済的負担が増えることも原因です。管内には、私以外に三人の方が代務寺を持つておられますが、だいたい同じような状態です。

報告にあります。代務住職の手続きの簡素化と課金免除は実行していただきたい。特に手続きの簡素化は急務だと思えます。現在、「第十七条第一項の場合の住職代務者は、代務期間は三月とする。但し、特別の事由がある寺院に限りこれを三年以内とすることができる。」（住職担任教導選定規程 第十九条）となっておりますが、ほとんどの寺院は特別の事由があるようで、実質的には三年の任期です。宗制通り実行すると、三年ごとに登記手続き並びに宗務院への届け出が必要となつてきます。登記手続きは、大変煩雑で司法書士に頼めば数万円の手数料が必要となります。宗制には、就任・重任・退任したときは、宗教法人法第五十五条の規定により変更登記をしなければならぬとありますが、任期が長くなれば負担は低減されますし、任期を定めなければ重任の変更登記の必要はなくなります。全ての寺院の制限を取り除くことはできないと思いますが、「日蓮宗」規則には任期の明記はありませんので、規程

の中で、たとえば経済的理由から後継住職の就任が困難と認定される場合には、一期目の三年の間に審査し二期目以降任期の制限を取り除けばよいと思います。

おわりに

過疎地の寺院は、教研の報告にもあったように各自が最良の方法を求めて、布教活動・寺院経営に取り組んでいますが、試行錯誤の状態でこれといった最善策は見つかりません。宗門運動「立正安国・お題目結縁運動」の詳細は未だ提示されていませんが、過疎地寺院の多様化した活性化プランなくしては、立正安国・お題目結縁は空念仏ならぬ空題目になってしまいます。